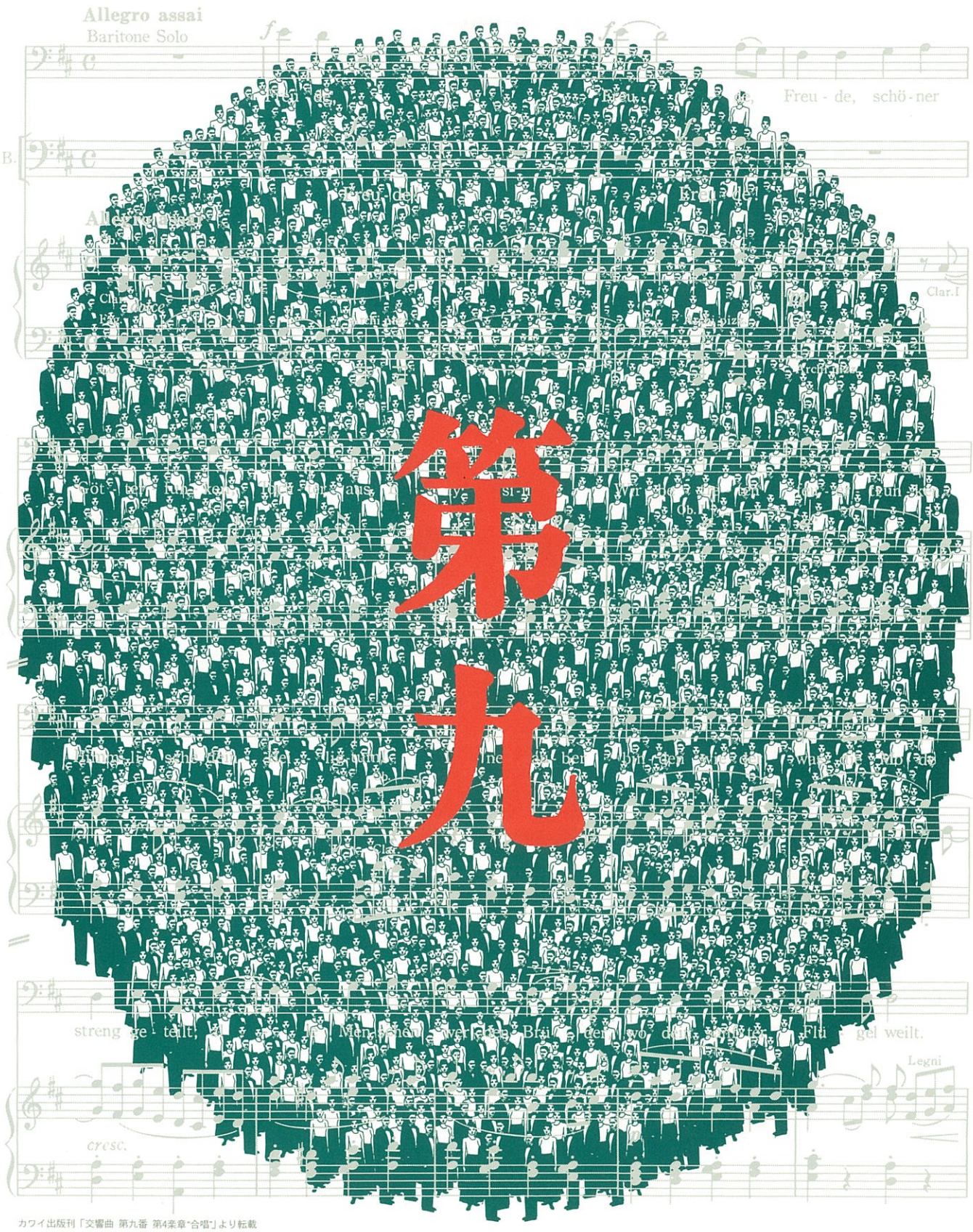


カワイ出版刊「交響曲 第九番 第4楽章"合唱"」より転載

'98春日井市民第九演奏会

とき 1998.12.6 SUN 午後3時開演　春日井市民会館

主催　春日井市、春日井市教育委員会、'98春日井市民第九演奏会実行委員会
共催　春日井市交響楽団、春日井第九合唱団
後援　中部大学、中部大学女子短期大学、中日新聞本社

ごあいさつ

春日井市長　**鵜飼一郎**

本日は、「'98春日井市民第九演奏会」にようこそお越しくださいました。師走のひととき、皆様とともに「第九」の調べを鑑賞できることをうれしく思います。

平成５年に市制50周年を記念して初演されて以来、本年で第６回を数えます春日井市民第九演奏会は、毎年多くの市民の皆様方の参加を得まして、この時期に欠かすことのできないイベントとして定着してまいりました。これもひとえに、春日井第九合唱団と春日井市交響楽団の皆さんを始め、関係の皆様の多大なるご尽力と熱意の賜ものと感謝申し上げます。

「第九」はベートーヴェンの作品の中でも難曲として知られております。これを合唱から管弦楽まですべて市民の手で作り上げるには、並々ならぬ努力が必要であると思います。しかし、毎年新たな参加者を加えながらも、春日井第九合唱団も春日井市交響楽団も年々その実力を蓄え、年ごとに特色ある演奏で私たちに感動を与えてくれています。魅力ある市民文化の創造をまちづくりの大きな柱の一つとし、市民の皆様の主体的な文化活動を支援しておりますわが市にとりましては誠に心強く喜ばしいことです。

今回は、昨年に引き続き、指揮者に「第九」初演の地ウィーンからエルンスト・タイス氏をお招きし、皆様とともに「ウィーン第九」の真髄を味わえるものと期待しております。

どうぞ、ごゆっくりお楽しみください。

'98春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学長　**山田和夫**

春日井市の歳末を彩る恒例の「春日井市民第九演奏会」にようこそおいでくださいました。

12月になると私たちの心は、なんとなく慈愛に満ちます。どうやらそれは、貧しい人たちが寒さに震える木枯らしが吹き、歳末助け合い運動があり、クリスマスがあり、そして、友愛を歌ったこの「第九」があるからでしょう。その慈愛の心を意味する「チャリティ」(charity)は、ラテン語の「カリタス」からきた言葉だそうです。「カリスマ」(charisma：神から与えられた強烈な個性や指導力）と同じ語源を持つ「カリタス」は、私たちに向けられた神の愛とそれに応えて人々につくす私たちの心を意味します。「第九」ほど「チャリタブル」(charitable：慈愛に満ちた）な音楽はないでしょう。本日の第九演奏会はチャリティ・コンサートではありませんが、私たちの演奏する音楽を聴いたみなさまは、まず、木枯らしに震える不幸な人たちを思い、隣人に対してチャリティの心を強烈にお感じになることでしょう。「チャリティ」と「コンサート」が結びつくのは、その瞬間であり、心から心へ直接伝わる音楽だけがそれを可能にするからです。

今年もまたウィーンから指揮者をお招きしました。エルンスト・タイスさんは、昨年、情熱的な指揮で私たちを魅了したアレキサンダー・ドゥルカーさんの先輩指揮者に当たります。ソリストは、いま話題の蓮井求道さんとそのお仲間のオペラ歌手のみなさまです。

今年もまた、素晴らしいカリスマ性を持った音楽家たちと日々友愛を実践している春日井第九合唱団と練習熱心な春日井市交響楽団による充実した「第九」をみなさまにお聴ききいただけることと存じます。では、ごゆっくりとお楽しみ下さい。

プログラム
Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN(1770-1827)

交響曲第９番 二短調 作品125「合唱つき」
Symphony No.9 in d-minor op.125 〝Choral〟

第１楽章　アレグロ マ ノン トロッポ，ウン ポコ マエストーソ
1 mov.　Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第２楽章　モルト ヴィヴァーチェ
2 mov.　Molto vivace

第３楽章　アダージョ モルト エ カンタービレ
3 mov.　Adagio molt e cantabile

第４楽章　フィナーレ，プレスト － アレグロ アッサイ － レシタチーボ － アレグロ アッサイ
4 mov.　Finale, Presto － Allegro assai － Rezitativo － Allegro assai

指揮者
Conductor
エルンスト・タイス
Ernst Theis

ソプラノ Soprano
塚田京子

アルト Alto
玉敷やよい

テノール Tenor
森岡謙一

バス Bass
蓮井求道

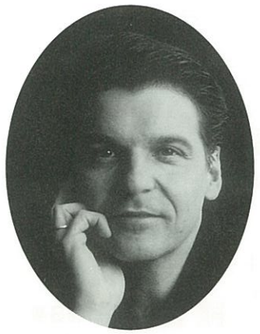
音楽監督　**都築正道**
Music director

合唱指揮　**吉川　朗**
Chorus conductor

管弦楽　**春日井市交響楽団**
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

合　唱　**春日井第九合唱団**
KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介



指揮者　エルンスト・タイス

1961年にオーストリアのオーバーエスターライヒ州に生まれ、ウィーン音楽大学で指揮と打楽器とトランペットを学びました。まず、オーケストラの指揮の勉強をするのにもっともふさわしい場所である打楽器奏者として活躍。ウィーン国立歌劇場やORF交響楽団の打楽器をつとめ、打楽器のソリストとしても、「ニーダーエスターライヒ現代の秋」などに出演。1992年から指揮者として本格的な活動を始め、ウィーンの青年劇場で「音楽劇場の胚芽シリーズ」の現代小オペラの指揮をしました。それ以降、ウィーンフィルの室内オーケストラの指揮者としてポーランド・ツアーを行うなど、内外のオーケストラを指揮して好評をえています。昨年、春日井市民第九演奏会の指揮をした、アレキサンダー・ドゥルカーさんのウィーン音楽院での兄弟子に当たり、今回、初の日本公演が大きな話題を呼んでいます。

ソプラノ　塚田京子

桐生市出身。国立音楽大学およびボローニャ国立音楽院卒業。1980年第18回ジーリ・コンクール第１位、同年第１回ストラッチャーリ・コンクール第１位。1981年にバヴァロッティ・コンクールで優勝するなど国際声楽コンクールを次々と制覇。1982年、フィラデルフィアにおける「ラ・ボエーム」のミミをバヴァロッティと共演して、オペラ・デビューを飾る、1985年から翌年にかけて、ヴェルディの《エルナーニ》（エルヴィーラ）をモデナなどのイタリアの歌劇場で歌い、最大級の賛辞を浴びる。日本には1983年、日生劇場の《フィガロの結婚》の伯爵夫人でデビュー。1986年10年間のイタリア留学を終えて帰国。藤原歌劇団の《ラ・ボエーム》のミミで絶賛を博した。平成５年度文化庁芸術祭賞受賞。藤原歌劇団団員。国立音楽大学専任講師。

アルト　玉敷やよい

武蔵野音楽大学声楽科卒業。洗足大学マスターコース修了。中山悌一、伊原直子，中島基晴など諸氏に師事。1986年渡伊。ミラノ・ヴェルディ音楽院に入学。アントニオ・ベルトラミ、ジュリエッタ・シミオナート諸氏に師事。1989年イタリアのベルガモ歌劇場において「椿姫」のフローラ役でデビュー。その後ヨーロッパ各地の歌劇場に出演。国内においても、労音主催「人間を返せ」、ベートーヴェンの「第九」、ヘンデルの「メサイヤ」や数多くのオペラのほか、NHK-FMクラシックなどにも積極的に出演。1990年よりイタリアの演奏家と共に労音主催「イタリア・音楽紀行」の連続演奏会を各地で開催。1997年同総集編のCDをリリース。現在、国内はもとより、ヨーロッパで幅広い活躍をつづけている。二期会会員。

テノール　森岡謙一

ウィーン・コンセルバトリウム・オペラ科を卒業。1985年にウィーン国立歌劇場研究所に入る。アイネムのオペラ《老婦人の訪問》の医師役でウィーン国立歌劇場にデビュー。日本人男性としては二人目の快挙となる。以来、ヨーロッパの各地で活躍。1987年からミラノに移り、イタリア・オペラのレパートリーを確実なものにする。イタリアやスイスをはじめ各地のコンサートやテレビで活躍。1990年から本拠地を北九州に移して地元の音楽文化振興につとめ、1997年に北九州市民文化奨励賞を受賞。《椿姫》のアルフレート、《ドン・カルロ》のタイトルロール、《アイーダ》のラダメス、《仮面舞踏会》のリッカルドなどの主役をつとめる。ソリストとして、ベートーヴェンの「第九」をはじめ各種のコンサートに出演。我が国では数少ない実力派のリリコ・スピント・テノール。

バス　蓮井求道

作陽音楽大学声楽科、同学部専攻科に学び、堤温、三枝喜美子の諸氏に師事。1981年から87年まで同音楽大学教授をつとめる。オペラマイスタークラスを創設、室長。74年渡伊。ミラノ・ヴェルディ音楽院に入学。1981年、ウィーン国立音楽院オペラ科、同オペラマイスタークラスに学ぶ。第12回トーティ・ダル・モンテ国際コンクール第１位（伊）。第８回日伊声楽コンクール金賞（日）。ジュリエッタ・シミオナート特別賞（伊）を受賞。シミオナート女史に師事。ヨーロッパ15ケ国の歌劇場で、主要な役を180回以上も歌いつづけている。国内においては、二期会のオペラ「シモン・ボッカネグラ」などのオペラやオラトリオに出演し、そのレパートリーは25以上におよぶ。「イタリア・音楽紀行」連続演奏会を各地で開催し国内外で活躍、実力派として知られる。二期会会員。

音楽監督　都築正道

1940年名古屋市生まれ。名古屋大学文学部美学卒。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワーグナー研究」で文学博士。現在、中部大学教授。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。朝日新聞音楽評担当。春日井文化フォーラム・企画運営アドバイザー。春日井文化懇話会会長。「オペラ・トーク」「ハイビジョン・オペラ・シアター」など、講演会やＴＶや雑誌でオペラの解説。「名古屋オペラ・サロン」主宰。主著『楽劇：音と言葉の美学』（音楽之友社）。

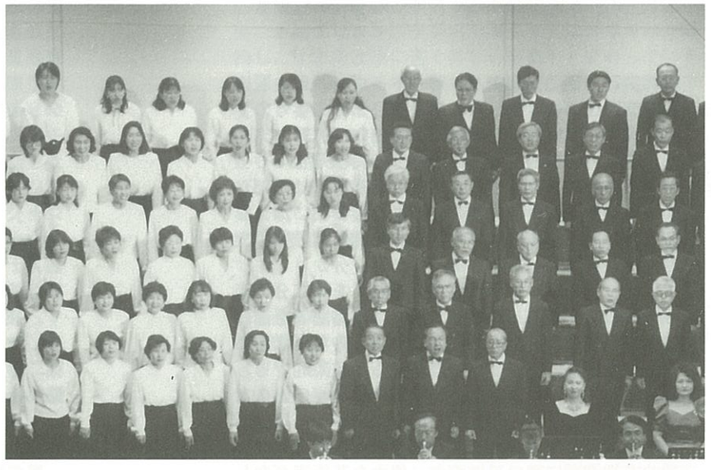
オーケストラ　春日井市交響楽団

平成２年11月、春日井市初のアマチュアオーケストラとして誕生。翌年創立記念演奏会を開催。以後毎年、春日井市民会館の満席の聴衆の前で定期演奏会を開き、今年７月の第７回定演でも、ベートーヴェンの「交響曲第３番・英雄」などを演奏して成功を納める。名誉会長の鵜飼一郎春日井市長、会長の山田和夫中部大学長、団長の花村浩克を中心とした約60名の団員が、春日井市の音楽文化の原動力となるべく日々研鑽を積んでいる。昨年９月の愛環「千人の第九」（名古屋市）・今年６月の「桑名菖蒲コンサート」（桑名市）・９月の「第１回愛環音楽祭」（瀬戸市）など、他都市にまで活動の場を広げて「音楽大使としての市民オケ」の役割を果たしている。今回の「第九演奏会」では、指揮者エルンスト・タイス氏と共に、「格調高い表現力豊かな演奏を実現したい」と意気込んでいる。

合唱指揮　吉川　朗

愛知教育大学音楽科卒業。同大学院（作曲）修了。あけぼの合唱団、大高北ＰＴＡコーラスを始め、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団などのオペラの正指揮、副指揮を務める。
名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。大垣女子短期大学非常勤講師。

ピアノ伴奏（合唱団）
竹内理恵



合唱　春日井第九合唱団

平成５年12月の春日井市制50周年記念「第九演奏会」に出演した春日井市民を中心に結成された合唱団。それ以降、毎年12月に開かれる春日井市民第九演奏会に、200名の大合唱団として出演。創立以来、ベテランの指導者吉川朗先生の熱心な指導に加えて、団長の荒川昭代とそれを支えるスタッフの優れたリーダーシップが、経験豊かな団員を勇気づけ、心のこもった質の高い演奏を生みつづけている。昨年９月に春日井市交響楽団と共に愛環「千人の第九」演奏会に出演。今年９月にも「第１回愛環音楽祭」（瀬戸）に各都市の合唱団と一緒に参加し、吉川先生の指揮で「ふるさとの四季」を歌い好評を得る。今回は、新しいメンバーもたくさん加わって、「昨年以上にダイナミックな合唱をお聴かせしたい」と張り切っている。

Ludwig van Beethoven

第九交響曲とその兄弟たち

―第九をより楽しむために―

精神史としての音楽史　ベートーヴェンは生涯に10曲の交響曲を書きました。１から９までの番号のついた「九つの交響曲」と「戦争交響曲」(1813) です。自動合奏用の機械のために書かれた「戦争交響曲：ウェリントンの勝利またはヴィットリアの戦い」は二部からなるわずか14分の作品なのでこれは交響曲に加えないことにして、９曲すべての交響曲を聴くと最後の交響曲がいかに特別なものであるかが良く分かります。逆に、ベートーヴェンの「第九交響曲」を十二分に楽しみ理解しようとするならば、一度は交響曲を全部聴いておく必要があります。いえ、それはみなさまがお思いになるほど、面倒でも、退屈でも、教条的でも、形式的でもありません。そこにはヨーロッパの悠久な歴史が感じられるだけでなく、いかにベートーヴェンが音楽で思考したかが良く分かります。次から次へと交響曲を初演順に聴いていくと、偉大な芸術家がなした「精神史としての音楽史」が見事に展開されていく現場に立ち合う興奮を禁じ得ないからです。注目すべきは、今回の第九の指揮者エルンスト・タイスさんが指摘しているように、共通したテンポ感が一本の太い黄金の柱となって９曲全体を貫いていることです。

マンモス交響曲　また、９曲をより楽しくまとめて聴く秘訣は、これを一つの雄大な「一つの交響曲」として交響曲の順番を入れ替えて聴くことです。すなわち、全体を四楽章に分けます。交響曲の「第一番」と「第二番」は若々しいアレグロの第一楽章です。「第三番」と「第六番」はゆっくりした第二楽章です。「第四番」と「第七番」はスケルツォの第三楽章で、激しい「第五番」とメッセージ性の高い「第九番」は終楽章です。え？「第八番がない」って？　ええ、「第八番」はアンコールにとっておきましょう。

遅れてきた青年　ベートーヴェン（1770-1827）は、ヘーゲルと同じ年に生まれ、ナポレオンより一歳年下でした。彼ら三人はフランス革命に遅れて来た青年たちでしたが、各々の生き方で革命後の厳しい時代を使命感をもって切り拓いていったのも彼らでした。特にベートーヴェンは、フランス革命の年（1789年19歳）にボン大学の聴講生になり、講壇から熱っぽく説く革命派の教授たちの革命思想に鼓舞された若者の一人でありました。22歳のとき、数年の留学のつもりでウィーンにやって来ました。ところが、ボンも革命軍の侵入でパトロンの選帝侯マキシミリアン・フランツが逃げ出したので、故郷へ帰ることもできないまま幸か不幸か音楽の都ウィーンに放り出されてしまいました。それから８年、見事に成長した30歳の作曲家ベートーヴェンが、満を持して放ったのが「交響曲第一番」でした。「ベートーヴェンは新しい聴衆を作曲した」と言われるように、恐れを知らぬ傲慢な若者は、「聴衆のための音楽ではなく、音楽のための聴衆だ」と思っていたようです。伝統への革命が既にしてこの交響曲にあります。

聖なる約束　「交響曲第二番」が完成されたのは1802年（32歳）とされています。その年は、「ジュリエッタ・グィチアルディとの悲恋」に青春を捧げた年であり、あらゆる治療の果てに「耳の疾病の不治を覚悟」した年であり、あの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれた年でもあります。ベートーヴェンが人生において最も悩み苦しみ、自殺も考えた時でありました。彼は常に挫けません。彼は弟のカールに宛てて一通の手紙を書きます。これが「ハイリゲンシュタットの遺書」(Heiligenstadt Testament)と呼ばれるものです。彼の死後偶然発見されたこの「出されなかった手紙」は弟たちへの遺言状といった体裁を取っていますが、決して死や自殺を前提とした「テスタメント」(遺書)ではありません。そこには、「旧約聖書」(AltesTestament) や「新約聖書」(Neues Testament) の「テスタメント」の持つもう一つの意味、すなわち、彼が神にむかってなした「聖なる約束」であったのです。彼は、「不幸にではなく幸福になろう」と神に約束したのです。そのテスタメントの音楽化が「交響曲第二番」です。これからのち、彼は自分を見舞った過酷な事件に対して不屈の闘志を駆り立てていくのでした。

真の英雄　或る日、友人のクッフナーがベートーヴェンにたずねました。「あなたの交響曲のなかでどれが一番お好きですか」「『エロイカ』だよ」「私は『五番』かと思っていましたが…」「違う、全く違う。『エロイカ』、『エロイカ』だよ」とベートーヴェンは答えました。「英雄交響曲」は、音楽史における奇跡です。従来の古典交響曲とは質も量も異にする全くの前衛音楽であったことは事実で、初演のときの聴衆の激した反応からもそれがうかがえます。なぜ、ベートーヴェンは、保守的なウィーンの人々を残念がらせるような前衛音楽を貫いたのでしょうか。それに答えるには、ただ一つのことについて語れば充分でしょう。それはベートーヴェン自身がこの曲について書いた「英雄」というタイトルの真の意味についてです。彼は、この曲をナポレオンを念頭において書いたものの、ナポレオンが突然皇帝になったので大いに失望しました。ナポレオンを、人領の英雄、すなわち、人民のための自由の砦となる偉大な人物と見なしていたのですが、反人民性を本質とする皇帝ナポレオンなど彼にとってはもう権力欲に満ちた俗物にすぎませんでした。彼の「英雄交響曲」は、それ以後、実在した歴史上の英雄たちとは全く違った、理念上の英雄たち、すなわち、理想主義の実現に務める未来の英雄たちに捧げる賛歌となったのです。終楽章の長い変奏曲の主題を彼の「プロメテウスの創造物」から借用したことがこれを象徴的に証明しています。神につかえる巨人でありながら人間を愛し、その人間に神から盗んだ火を与えるプロメテウスこそ理想の英雄であると主張しているのです。

パロディとカタルシス　「第四交響曲」は、「英雄交響曲」で極めて大胆な作曲上の冒険をしたベートーヴェンが、もう一度調子を整えるために、交響曲の原点であるハイドンの基本的なソナタ形式に戻った「パロディ交響曲」でした。「英雄」のあと「第五番」と「田園」を完成することができたのも、この「第四番」の正統的な書法に帰ることに寄る「フォームの調整」が功を奏したからでした。この交響曲は「英雄」のカタルシス版であり、むろん、退屈からはほど遠い、機知とパロディに満ちあふれた傑作です。その破格のリズムは、伝統的なフィナーレをすべて流し去ってしまう激しさです。

双子の兄弟　同時に作られ同時に初演された双子の「交響曲第五番」と「第六番」は、すべての点で相異なり、すべての点で相似通っています。「相違点」は、交響曲は「絶対音楽」か「標題音楽」か、音楽構造は「主題労作(thematische Arbeit)」か「美しいリート的主題」か、主題展開は「循環形式（前楽章の回帰)」か「物語的展開」か、主題音型は「各楽章を統一するオクターブ音型」か「多様な動機の組合せ」か、楽章数は「４楽章」か「多楽章」か、スケルツォは「ABA」か「ABABA」か、オーケストレーションは「精神的に激しい響き」か「自然でアコスティッシュな響き」か――などなどが上げられましょう。「共通点」は、楽器編成で「新楽器の採用」「ソロ演奏の多用」「マニフェストの採用：苦しみを通じて歓喜へ・自然と人生」「アーティキュレーションの活用：スフォルツァンドの多様・50小節におよぶ長大なクレッシェンド」などなどです。しかし、共通点のすべてが相違点を強調するためのもので、ここにもベートーヴェンの逆説があります。

作曲家のボタン　「あらゆるボタンを外して書いた」と作曲者自身がいっているように、「交響曲第七番」はその屈託のないおおらかな古典的晴朗さが何よりの魅力です。また、「酔ったときに作った」といわれるほどディオニソス的な狂騒感が全曲を支配していて、ベートーヴェンには珍しい天衣無縫な音楽となっています。この交響曲が作曲された1813年といえば、ナポレオンの侵略から解放された国々や諸都市が戦勝に涌いた年でした。ウィーンは街をあげて戦没兵士のための大慈善音楽会を催しました。ベートーヴェンの総指揮、ウィーンの有名音楽家総出演によるそれは盛大なものでした。そこで演奏されたのがこの「第七番」と「戦争交響曲ウェリントンの勝利」（作品91）でした。この両曲とも市民の熱狂的な歓迎をうけました。その人気は翌年までつづき、新たに「交響曲第八番」も書き下ろされて演奏会は連続５回の多きを数えたのでした。1814年のウィーン会議では、ベートーヴェンは国際的な名士として世俗的な名声を一身に浴び、彼の生涯における最も時流に乗った時でありました。それが、苦悩を売り物にしていると私たちが考えがちのベートーヴェンにとって、決して悪い環境ではなかったことをいつも思い起こすべきです。

神々の火花　シラーは「歓喜よ！　美しき神々の火花よ!」と歌っています。すなわち、熱い炎が硬い鉄どうしを熔接するように、美しい神々の火花である「歓喜」は私たちの多様で種々様々な心を溶かして一つにすることができるのです。「時の流れによって厳しく引離されたもの」を一つに結びつけるのは、神の御業である「歓喜」です。「歓喜」は「共通体験から生まれる感動」のことだといっていいでしょう。

トルコ行進曲　前半のクライマックスのあと、ピッコロと大太鼓とシンバルにトライアングルが加わって奇妙な行進曲を奏でます。この騒然とした異国風の行進曲は、明らかにトルコの軍楽隊を模したものです。テナーのソロに先導されて男声合唱が勝利の歌を歌います。このメロディも巧みにアレンジされた「喜びの歌」です。トルコ人で代表される異教徒たちも、宗教を越えて人類愛の歌に和しているのです。

苦悩を通じて歓喜へ　テナー・ソロと男声合唱による行進曲が終わったところから、軽快な行進曲の気分を受けついでオーケストラだけによる後奏（110小節）が始まります。テンポも崩さず、エネルギーを維持したままで次第に苦く苦しい音楽へと変わっていきます。それはまるで、私たちをこの快楽の俗世界から聖なる神々の国へ連れ出さんとするかのような激しい音楽です。この苦悩の旅の果てに、突然オーケストラがクレッシェンドすると、最強音の大合唱による「喜びの歌」が湧き起こります。それも長調で、８分の６拍子という底抜けに明るい喜びの世界が現われるのです。「喜びの歌」と「抱擁の主題」による二重フーガです。

音楽の叡智　二重フーガの二つの主題は各々同時に展開していき複雑な二重螺旋の世界を生み出していきます。ベートーヴェンはこの重層的な形式の音楽によって、別々の内容を持った二つの詩句「ようこそ百万人の人よ!」と「歓喜よ！」を象徴的に結びつけるのに成功しています。かくて「万人による歓喜の歌」というベートーヴェンの理想がここに実現するのです。これは、精神的な地平でのみ可能と思われる、極めて形而上的な現象です。同時代の哲学者ヘーゲルでも羨むほどの見事さであり、音楽の叡智の哲学に対する勝利を物語るものです。ある人が現代作曲家のシェーンベルクに尋ねました――「なぜベートーヴェンは、声楽入りの第九交響曲を乱雑だといわれながらも書きつづけたのですか」。彼は言いました――「答は一つしか知らない。彼には言わねばならぬことがあったからだ」。正にその通りで、彼には言わなければならないことがあったのです。

（都築正道）

慰めと揺れの第九交響曲

'98春日井市民第九演奏会音楽監督
都　築　正　道

10回目の初来日　昨年のアレキサンダー・ドゥルカーさんに引きつづき、ウィーンから指揮者をお招きしました。エルンスト・タイスさんも、ドゥルカーさんと同じ先生に師事し、彼よりも３歳先輩の指揮者です。タイスさんは、今回の来日で10回の多くを数えますが、実は初来日です。なんのことかといいますと、これまでは打楽器奏者として色々なウィーンのオーケストラと共にきたのですが、指揮者としてはこの「春日井第九」が日本デビューになるからです。現在の彼は大変な売れっ子で、ウィーンのフォルクス・オパーやリンツのブルックナー交響楽団をはじめ、たくさんの劇場やオーケストラから指揮の依頼が殺到しています。現代音楽を指揮したCDも三枚立て続けに出ています。その彼が、春日井の第九で日本デビューを果たそうというのですから、私たちはとても緊張しました。「彼の日本デビューを、ぜひ、大成功で飾りたい。彼と一緒に最高の第九を演奏しよう」という気持ちでいっぱいになりました。私たちは、一生懸命に練習して、大きな声と大きな音で彼を迎えました。ところが、彼の反応は違いました。

ルーエ　先の春日井第九の合唱とオーケストラの練習で彼が強調したのは、「フォルテとフォルテシモで、怒鳴ったり、叫んだり、ヒステリックになったりしないで下さい。無理に力を入れなくても、響きを大切にすれば、ベートーヴェンが求めていた強く大きな音が出ます」。彼は、そんなとき、「“Ruhe” な音楽を」といいました。「ルーエ」というドイツ語は、「憩い」「慰め」「安らぎ」といった言葉です。そういえば、ウィーン・フィルに代表されるように、彼らの音楽はいつもとても「優しい」感じがします。テインパニでも、トランペットでも、決して激したり怒ったりしません。モーツァルトのオペラを聴くと良く分かりますが、ケルビーノが軍隊に行くときの行進曲の太鼓とラッパの美しさはどうでしょうか。彼らの戦争はきっと「ルーエ」な戦争であるに違いありません。武力では劣るかも知れませんが、こんな軍隊と戦争したら、「だれでもきっと負けるだろうな」という優しさとヒューマニズムがあります。それこそ、ベートーヴェンが第九交響曲で求めたものかも知れません。

テンポ感のルーエ　「ベートーヴェンの交響曲のテンポは、すべてどこかでつながっている」というのが理論派のタイツさんの意見です。むろん、長い交響曲にあっては、一楽章のなかでも、テンポは速くなったり、遅くなったりします。「だが、基本となるのはただ一つのテンポだ」と彼はいいます。モーツァルトやハイドンやベートーヴェンの初期の時代は、指揮者はいませんでした。ヴァイオリンのトップを奏いているコンサートマスターが出だしを合図するぐらいで、複雑で急激な速さの変更はとても無理でした。「それで、途中から三拍子になっても四拍子になっても、音符の長さを倍にしたり半分にしたりするものの基本的な速さは変わらない」のです。特に興味深いのは、「第九交響曲」の全体を貫いて流れるテンポ感です。第二楽章のスケルツォのテンポ「とても速く」（Moit vivace）のあとで出てくる「速度を速めて」（stringendo il tempo）と第四楽章のテノールのソロのあとの速い暗い長い後奏の「優れて元気良く快速に」（Allegro assai vivace）との相関性です。「楽章を隔てていても、この二つは同じテンポでなければならない」とタイスさんはいいます。オーケストラは、彼の速いテンポに大変とまどいましたが、なるほどこれはとても気持ちの良いテンポです。知的で、構成的で、歴史的で、安定的で、ルーエな感じがするからです。

良い人たちと音楽を楽しむ喜び　演奏会を前にした彼は、いま、今回の日本への招聘をとても喜んでいます。「合唱団も、オーケストラもみなさんとてもいい人ばかりです。みなさんは音楽が大好きで、心から音楽を楽しんでいます。私の最高の喜びは、こういった良い人たちと音楽をすることです」。彼は、また、第九の練習場のハーモニー春日井を、「最高に素晴らしいホールだ」と大変誉めてくれました。「休日になると、アマチュアのみなさんが、こんなに恵まれた環境でいい仲間と一緒に音楽が楽しめるなんて最高の喜びでしょう」。彼は、音楽が好きで好きでたまらないのです。「ウィーンにいる生後一八ヶ月の娘に会いたい」以外は、日本での私たちアマチュア音楽家とのおつき合いに満足しています。ドゥルカーさんとタイスさんを最初に私たちにご紹介下さったのが、ウィーンで彼らと知り合ったアマチュアのクラリネット奏者の山本浩嗣さんであったことは決して偶然ではありません。

心の揺れ　ベートーヴェンの第九が大好きな私たちは、私たちの第九こそ唯一最高のものだと思っています。しかし、二人のウィーンの指揮者と一緒に第九を演奏してみると、それが余りにもセンティメンタルで、感情的で、暴力的で、散文的な第九であったような気がしてきました。特に、タイスさんの統一されたテンポ感と優しいフォルテを感じながら、そう思いました。そういった私たちの心の揺れを、本日みなさまにありのままお聴きいただきたいのです。

【ベートーヴェン：交響曲構成表】

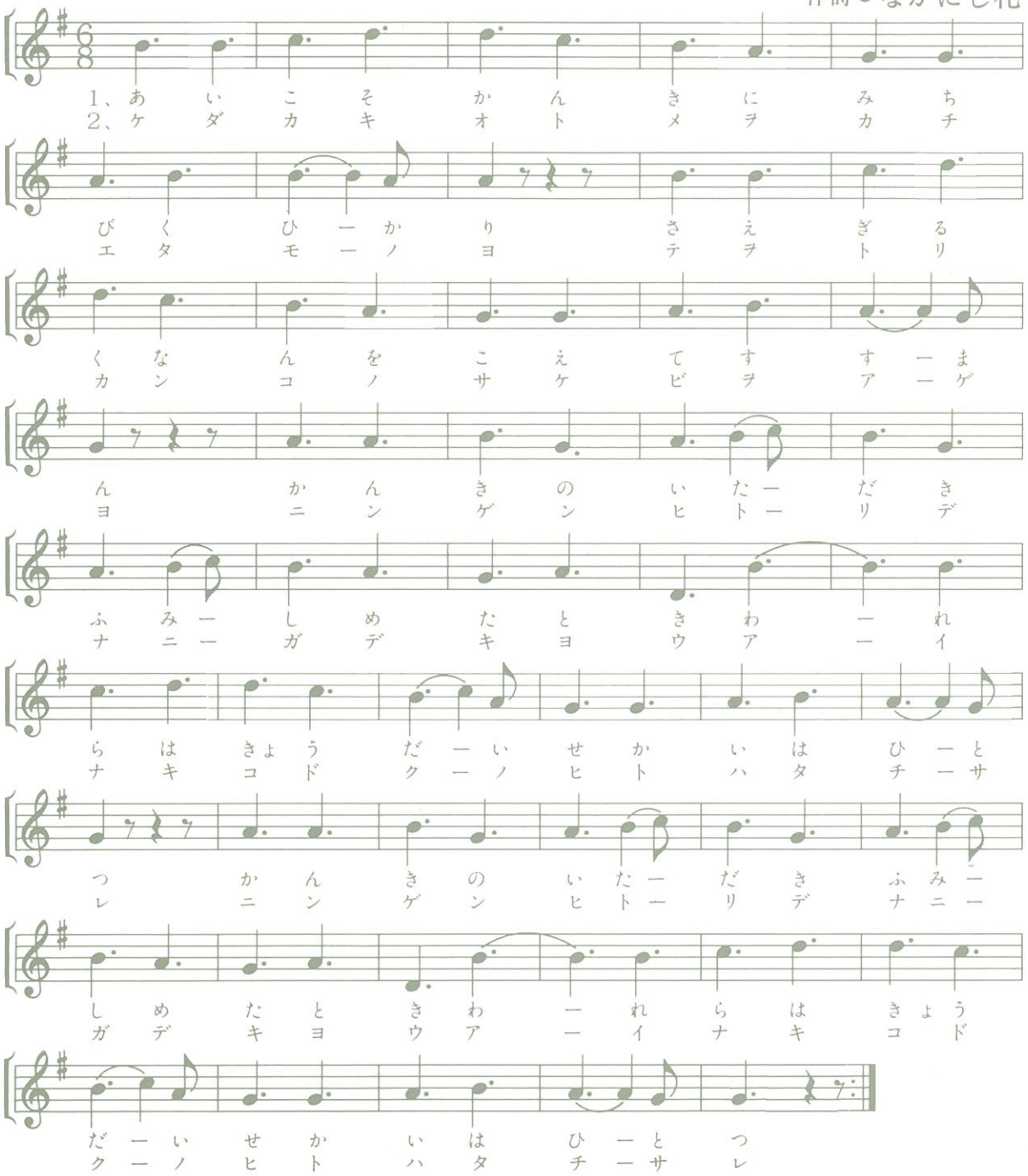
交響曲番号	作曲年・初演年	第１楽章	第２楽章	第３楽章	第４楽章	楽器編成	初演会場	献呈先
第１交響曲 Op.21 ハ長調	1799年～1800年 1800年４月２日	Adagio molt(12)-Allegro conbrio(286) C：4/4-2/2拍子 ソナタ形式（３部）	Andante cantabile con moto(195) F：3/8拍子 ソナタ形式（３部）	Menuetto Allegro molt e vivace(137) C：3/4拍子 ABA	Adagio(6)-Allegro molt e vivace(137) C：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	2管編成。第２楽章：Fl.なし	ウィーン劇場 ブルク劇場主演奏会 第１回自主演奏会 作曲者自身の指揮	スヴィーテン男爵
第２交響曲 Op.36 ハ長調	1801年～1802年 1803年４月３日	Adagio molt(33)-Allegroconbrio(327) D：/4-4/4拍子 序奏ソナタ形式（３部）	Larghetto(276) A：3/8拍子 ソナタ形式（３部）	Scherzo Allegro (130) D：3/4拍子 ABA	Allegro molt(442) D：2/2拍子 ソナタ形式（４部）	2管編成。第３楽章：Tr.Tim.なし	ウィーン劇場 ウィーン初演 自主演奏会 作曲者自身の指揮	リヒノウスキー公爵
第３交響曲 Op.55 変ホ長調『英雄』	1803年～1804年 1805年４月７日	Allegro conbrio(691) Es：3/4拍子 ソナタ形式（４部）	Adagio Assai(247)（葬送行進曲） c：2/4拍子 ソナタ風３部形式	Scherzo Allegro vivace(397) Es：3/4拍子 ABA	Finale Allegro molt(473) Es：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	2管編成。第３ホルンあり	ウィーン劇場 ウィーン初演 クレメント主催演奏会 作曲者自身の指揮	ロブコヴィッツ侯爵
第４交響曲 Op.60 変ロ長調	1806年 1807年３月	Adagio(12)-Allegro vivace(460) B：4/4-2/2拍子 ソナタ形式（３部）	Adagio(104) Es：3/4拍子 ソナタ形式（２部）	Allegro vivace(460)（スケルツォ楽章） B：3/4拍子 ABABA	Allegro molt(355) B：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	2管編成。Fl.は１本	ウィーン劇場 ロブコヴィッツ侯爵邸 作曲者自身の指揮	オッペルスドルフ伯爵
第５交響曲 Op.67 ハ長調『運命』	1807年～1808年 1808年12月22日	Allegro conbrio(502) c：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	Andante con moto(247) Es：3/8拍子 変奏曲（６部）	Allegro(373)（スケルツォ楽章） c：3/4拍子 ABA(BA)	Allegro(444) C：4/4拍子 ソナタ形式（４部）	2管編成。終楽章：Trb.３、Picc.Cfg.	ウィーン劇場 ウィーン初演 作曲者主催・指揮 交響曲第６番として。	ロブコビィツ侯爵と ラズモフスキー伯爵
第６交響曲 Op.68『田園』	1807年～1808年 1808年12月22日	Allegro ma non troppo(512) F：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	Andante molto(139) B：12/8拍子 ソナタ形式（３部）	Allegro(264)（スケルツォ楽章） F：3/4拍子 ABABA	Allegro(155) F：4/4拍子 幻想曲（４部）Allegretto(264) F：6/8拍子 ロンド風ソナタ形式	2管編成。最後の３楽章：Trp.「嵐」：Picc.第２楽章:２人の Vc.Solo.	ウィーン劇場 ウィーン初演 作曲者主催・指揮 交響曲第５番として。	ロブコビィツ侯爵と ラズモフスキー伯爵
第７交響曲 Op.92 イ長調	1811年～1812年 1813年12月８日	Poco sostenuto(62) A：4/4-6/8拍子 ソナタ形式	Allegretto(278) a：2/4拍子 ソナタ形式（２部）	Presto(653)（スケルツォ楽章） F：3/4拍子 ABABA	Allegro conbrio(465) A：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	２管編成。	ウィーン ウィーン大学講堂 ウィーン初演 作曲者自身の指揮	
第８交響曲 Op.93 ヘ長調	1811年～1812年 1814年２月27日	Allegro vivace e conbrio(373) F：3/4拍子 ソナタ形式（４部）	Allegretto Scherzando(81) B：2/4拍子 ソナタ形式（２部）	Tempo de Menuetto (78) F：3/4拍子 ABA	Allegro vivace(503) F：2/2拍子 ソナタ形式（４部）	２管編成。第２楽章：Timp. Trp.なし	ウィーン ウィーン劇場 作曲者自身の指揮	リヒノウスキー侯爵
第９交響曲 Op.125 ニ短調『合唱付き』	1822年～1824年（最初の草稿 1817-19）（歓喜の頌歌 1797年） 1824年５月７日	Allegro ma non troppo, un poco maestoso(547) D：2/4拍子 ソナタ形式（４部）	Molto vivace(559)（スケルツォ楽章） d：3/4拍子 ABA	Adagio molt e cantabile (157) B：4/4拍子 変奏曲（７部）	Presto. Allegro assai. Rezitativo Allegro assai (940) d：3/4拍子他 カンタータ	2管編成。第２・４楽章に Hrn.2 と Tbn.3。第４楽章に Cfg.Picc.Trg.Cymb.GC.独唱４人と混声合唱	ウィーン ケルントナートーア劇場 作曲者の監督指揮 ウムラウフ総指揮	ヴィルヘルム３世

注）（ ）内の数字は小節数。《Kinsky=Halm Catalogue》と《The New Oxford History of Music(by Paul Mies)》に基く。作成：鶴田佳史

みんなで歌おう、春日井賛歌を‥‥

＜歓喜の歌＞

作詩●なかにし礼



1．愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2．気高き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ

日本音楽著作権協会(出)許諾第9810988-801